

名古屋SF読書会06カエアンの聖衣 2016・07・30

『カエアンの聖衣』アウトライン

1章 カエアンの交易船が事故のため惑星カイアに不時着した。情報を得た密貿易業者リアルト・マストは、部下のカストールとグラウン、服飾家のペデル・フォーバースとともに星間ヨット、コスタ号でカイアにやって来た。狙いは交易船の積み荷である、さまざまな衣類。インフラサウンドを持つ咆哮獣の攻撃を退け、一同は何とか積み荷の半分を手に入れる。

2章 戦争に備えてカエアン文明を研究するための調査船カラン号が、ツイスト腕で、脚部のない宇宙服に封じ込められたまま宇宙空間で生きる種族の一人、アレクセイを捕まえる。文化人類学者アマラ・コールは、古代ロシア語を話すアレクセイに驚く。

3章 惑星ハーロスの首都グリディラ。エレガントー服飾店で、ペデルは手に入れたファッション作のプロッシム製スーツを試着する。たちまちスーツは彼の人格を占有し、潜在能力を開花させ、気弱な姿から剛直で有能な人物へとペデルを変えてしまう。ペデルはマストらと対等に渡り合い、倉庫から衣服の取り分を持っていく。

4章 カラン号は人体を宇宙に適応させたサイボーグ達と遭遇する。彼らの身体は機械と融合し、砲塔や装置が身体から生えており、筏に乗ってカラン号を攻撃してきた。一体を捕獲して、スーツ人と同じ部屋に入れてみたところ、スーツがサイボーグを破壊してしまう。

5章 マストは、ハーロスでもっとも成功した故買屋ジャドパーの邸宅を訪れる。様々な趣向を凝らした悪戯に悩まされながらも、マストはカエアンの衣服をジャドパーに見せる約束を取りつける。一方、ペデルは三百階建てビルの上階を借りて住むようになっていた。

6章 アマラは、スーツ人の祖先はロシア人であり、サイボーグの祖先は日本人であるという仮説を皆に紹介する。サイボーグ社会のリーダーは「ヤクーサ・ボンズ」と呼ばれ、これは日本ではギャング組織と宗教組織が協力関係にあったことの名残である、と。スーツ人の一部は、やがてスーツを放棄し、惑星に入植した。これこそカエアン文明の元であるとアマラは語る。アマラとエストルーは、ガス巨星ソヴィヤのリングでソヴィヤ人と会見するが、そこへサイボーグ達が攻撃してきた。危ういところをカラン号に救われ、一行は探査を続ける。

7章 ペデルは社交界にデビュー。マストらもカエアンの商品が売れ、高級マンションに住むようになった。しかし、マストとグラウンは輸入法違反で警察に逮捕され、カストールだけが逃れる。

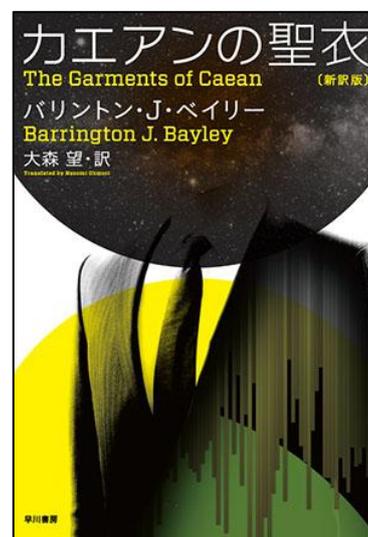
8章 第三大臣の誕生祝賀会で、カエアンに赴任経験のある大臣にスーツがプロッシム製であることを見抜かれ、ペデルはカエアン諜報員として逮捕される。スーツをはぎ取られそうになったペデルは身体から放電し、大臣らを殺害する。逃げた先のカフェテリアで、ペデルはカエアン製スーツを着用した4人の男と出会う。その後、カストールに会いスラム街に身を隠すが、そこでスーツをカストールに奪われる。



1983年4月30日初版発行



1994年3月デザイン改訂



2016年3月新訳版発行

9章 ペデル（終身刑）とマスト（懲役 20 年）は監獄惑星リドライトに送られた。遍歴の末、ザイオード星団の辺境惑星ヴェンスにやって来たカストールは、リトル・プラネット号を雇い、交易船の積み荷を餌に惑星カエアへ来るが、最後にカエアンへ向かおうとして乗員と対立。スーツとともに蠅の惑星に捨てられてしまう。カストールは蠅に食われるが、蠅を操ることに成功したスーツは、蠅とともにリトル・プラネット号に戻り、乗員を殺害。ペデルのもとに向かう。

10章 監獄惑星リドライトに辿り着いたスーツは、ペデルを操り、マストとともにリドライトを脱出する。

11章 カラン号はツツイスト腕の探査を続け、惑星ベラージュへと向かう。

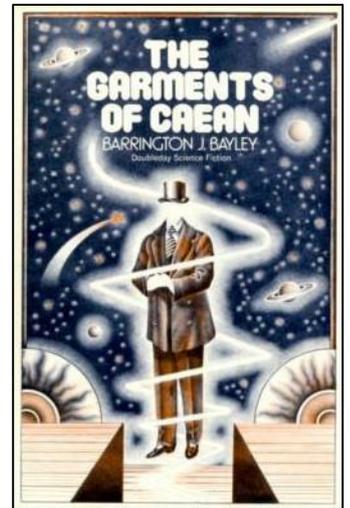
12章 カラン号はベラージュの首都インクサに着陸。アマラー一行は調和局長官コルダスクに案内され、宴席で歓待される。コルダスクは「衣裳ロボット」というのは莫迦げた先入観で、カエアンに攻撃的な意図は全くないと語る。カラン号は調査許可を得、豪華なショーが延々と繰り広げられる。アマラーは、パーティーにやって来たペデルとマストに会う。マストとアマラーはその夜、それぞれカエアンにおける性的倒錯者と過ごす。

13章 ツツイスト腕の果の手前、インカ風の都市ケツコルにやって来たペデルは、フラッシュナール・スーツを着用したオーティスに会い、プロッシム生地を表皮にしてしまった結社のメンバーや、受動的な機械知性が像を作り上げる「鏡」を見せてもらう。ケツコルでは、ベラージュで起きた文化的高揚が消極的な受動性にとってかわられつつあった。フラッシュナール・スーツを着用したファマクサーとも会う。一方、マストを乗せたカラン号はツツイスト腕の反対端で探査を継続。カエアン文化が減衰していないため、ソヴィヤとは別の第二の原点があり、それは惑星セレネだとの仮説をアマラーは導く。

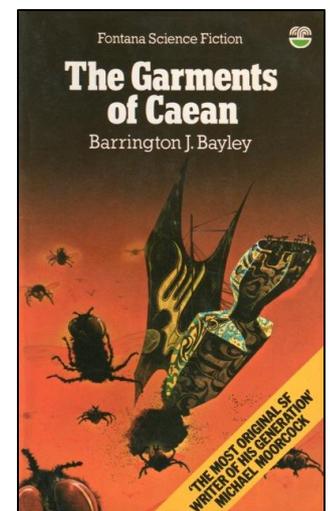
14章 カラン号は惑星セレネのヨモンド市に着陸。この惑星では人間性は大きく逸脱し、人々は衣裳ロボットと化している。フラッシュナール・スーツ 5 着が一堂に会し、聖なる場所に向かうところにマストは偶然出くわし、アマラーに報告する。

15章 収穫船に乗った 5 人（5 着）はプロッシム原生地にたどり着く。プロッシムは二重知性（能動的で同時に受動的な知性）を作り上げ、支配する側になるろうとしている。社会で経験を蓄えたスーツは、この惑星に帰還する必要があった。スーツを脱いだ 4 名はカエアン人であったため、裸に耐えられずショックで死んでしまうが、ペデルだけは生き残った。数百数千のスーツが実り、そこに収穫船を追ってきたカラン号が到着する。

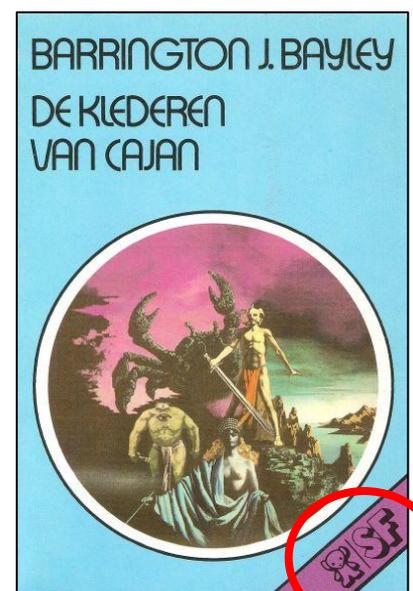
16章 プロッシム知性による人類侵略計画を防ぐため、アマラー達はプロッシムを焼き払おうとするが、精神エネルギーに影響されてしまい、失敗する。影響を受けないソヴィヤ人のアレクセイを使うことによって何とか焼却に成功するが、アレクセイは収穫船につぶされ死んでしまう。アマラーは事の真相をカエアン人に告げず、ザイオードに帰還する道を選ぶ。おそらく、ザイオードはこの惑星を殲滅し、カエアンとの戦争が始まるだろう。そんな中で、生き残ったペデルは、プロッシム製のネクタイ一本とプロッシムの胚嚢を惑星から運び出し、カラン号に持ち込んでいた。スーツを一着だけ作るために……。



1976 年 米 Doubleday 版



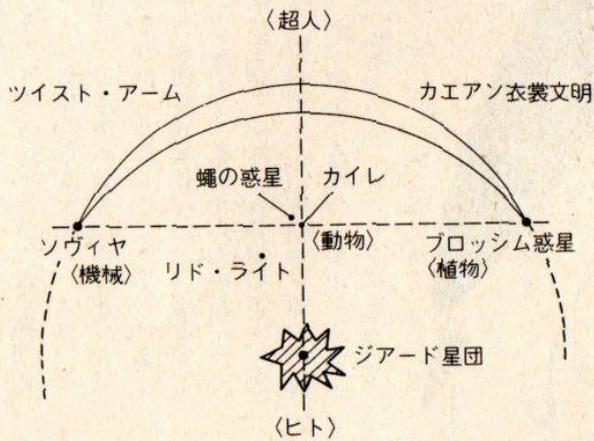
1978 年 英 Fontana 版



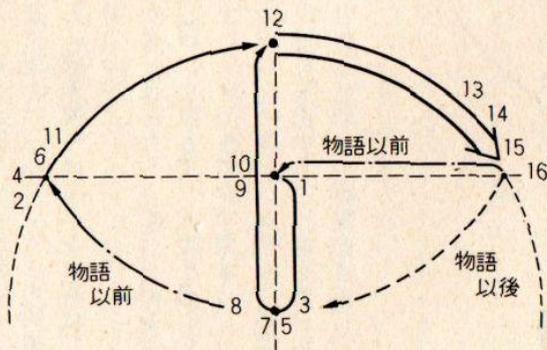
1978 年 蘭 Bruna 版
ディック・ブルーナの手による
SF マークがかわいい！



『カエアンの聖衣』の舞台（世界が三日月形と十字形の組合せから成っているのが、偶然ではないように思われる）

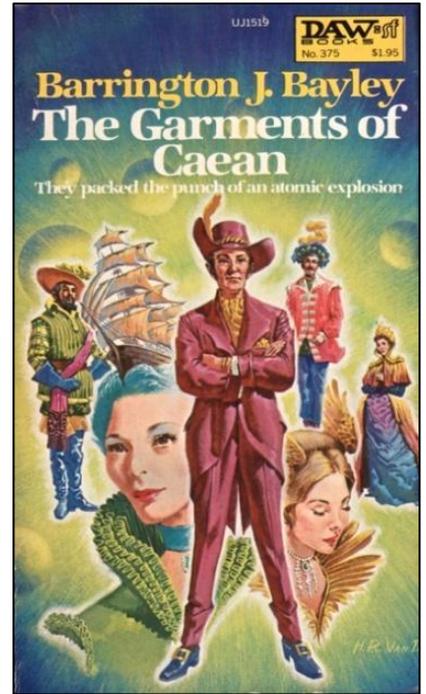


『カエアンの聖衣』の動き（数字は章・章の数の配分に見事なバランス感覚！）

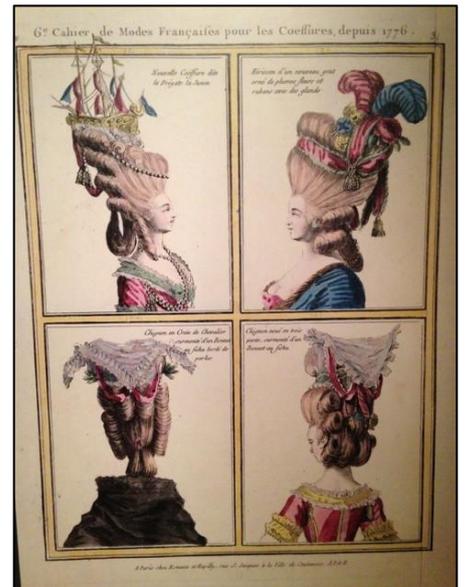


（*こうしてみると〈機械〉と〈動物〉領域を結ぶ動線が欠如しているのに気づく）

大宮信光「なぜ裸になれないか？」SFの本4号より



1980年 米 DAW 版



マリー・アントワネット展より
本当にあった帆船ヘア！

次回予定

2016年11月23日（水）

作品『ソラリス』

名古屋SF読書会URL

<http://www.ne.jp/asahi/science/fiction/dokusyokai/>